

芳賀 綏 はが やすし

日本人

言語文化論講義

らしきもの
構造

大修館書店

と「好み」の重なる部分（池上嘉彦教授は「意味論の周辺部」とも見る）に、いま、この本の議論が進んで来たところです。

●自動詞型発想の日本人

当店ではフランス語が通じます

これが日本人なら自然に出てくる言い方です。ところが、欧米では対照的だ。

Ici on parle français. (フランス語)

French is spoken here. (英語)

フランス語は能動態、英語は受動態の差はあるが、どちらも能動詞（行為動詞）を使うのです。右の日本語の言い方には人の動作は全く表に現れません。行為者は陰にひそむのです。

「この列車は、前寄り一号車、二号車と後寄り九号車が自由席となっております」

「なお、全席禁煙となっております」

すべて自然現象のような言い方で、車掌や駅員にとつても他人事みたいところが、すっかり身についた自動詞型発想です。

サピア・ウォーフの仮説を唱えた一人であるウォーフの記述によって、カナダの一部の原住民が使っているホーピ語は、出来事を中心にした叙述法で、その点「行為者＋行為」というインドヨーロッパ諸語の叙述法と対照的だということが知られ、その他世界のあちこちに、日本語寄りの叙述法の言語が存在することが明らかにされてきました。

佐久間鼎教授は、東洋大学の研究室でお傍にいた昭和三十二年以後の四年間を中心に、昭和初期以来のご自身の日本語理論をくり返し著者に説き聞かされ、「日本の表現」という言い方を反復強調されました。その中で佐久間教授が重視された一つが、日本語には物事が「おのづから然る」（本居春庭）式の自然本位的・超人間的な動作表現が多い、という点であつて、それはヨーロッパ諸語の「何者かがしからず」「何者かにさうさせられる」式の間本位的な傾向と対比される、というのでした（教授の著書『日本語の特質』『日本語のかなめ』などにその旨を文章化しております）。

古来、いわゆる助動詞のル・ラル（現代ではレル・ラレル）は、自発・尊敬・受身・可能の四つの意味を併せ担って来ましたが、なぜ一語でそういう作用がなされたのか。「この四つの意味の根本は自発つまり、自然の成行きを表わすところにある」（大野晋『日本語の文法を考へる』、傍点引用者）のだという説述は、行為動詞（能動詞）による能動態的表現を避け、「何者か」の意志が際立たないようにする日本的発想が、遠い古代の日本語以来のものであることを

理解させるものです。

佐久間教授は、日（自然本位）・欧（人間本位）の差が「由来するところは遠い、かつ深いものがある：」、それは「民族の世界観・人生観に淵源する」ものであろうかと記されましたが（『日本語の特質』）、この本の第一部に何度も説いた日本人の自然観（及び、人事をも自然と一体として見ようとする性向）と思いを合わせると、感興は俄然高まり、太古日本のアニミズムとの関係などに想像を及ぼし考察を進めたい誘惑がおさえがたくなります。

●「なる」言語に浸った日本人

一体、語順などの文法の基本構造は、いわば超文化的に（民族の世界観などと無関係に）根をおろし、固定しているものですが、そのルールの中で、どんな項目をどう配合して行くか（客観的な出来事を中心にするか、意志を持った行為者を主にするか、など）は、言語によって意識内容を表現する時の〈発想〉の型の違いです。そこに生じた社会的な慣用 (usage) の差であるわけです。

言語と文化のタイプロジー (typology, 類型論) という観点に立つ池上嘉彦教授によって、「する」言語と「なる」言語の対立という結論が提出されています（『する』と『なる』の言語学）。——前者は〈動作主指向型〉、後者は〈出来事把握型〉とも呼ぶべきで、この両者の対立は、「人間言語においてきわめて基本的な傾向」だということです。

早くから日本人は「なる」という動詞を多用すると評されてきた。人間の意向で事態を左右するのではなく事態の「成り行き」に任せるといふ発想のせいか、

食堂はあちらです。

と言うところを、

食堂はあちらになっております。

と言ったり、「料金は一泊〇〇円頂戴します」を「料金のほうは一泊〇〇円となっております」と言ったりします。「六時に閉店します」を「閉店は六時となっております」と言い、「これは地元でとれたイワナです」を「こちら、地元でとれましたイワナとなっております」とまで言います。「私達結婚シマス」という挨拶状を「私達結婚スルコトニナリマシタ」としたり。すべて人間に先行して客観的事態が成立していて、人間はそれを与えられるという発想です。

そして、日本語が「なる」言語の類型に属することは、オ読ミニナル式の敬語表現をも含めた日本語の表現法と、例えば次のように広くつながりを持っています。

“Thank you.”（私はあなたに感謝する）に相当する日本語は「ありがとう」ですが、自分が感謝する行為を表現せず「めったにない（感謝すべき）ことです」と言う。人間に焦点を当

てず事態全体を描写対象にするのです。また、英語の“A happy new year”は元来はその前にI wishのついたもので発言者が願望することを叙しますが、日本語なら「おめでとうございませす」であって、慶賀すべき（めでたい）事態が先に存在すると、客観描写に徹するわけです。

英語その他のインドヨーロッパ諸語の表現が〈行為叙述〉型ならば、日本語は深く〈状態叙述〉型に傾斜している言語で、全体としての凹型文化を強化支持する役をしています。

●「する」と「なる」を文化のタイポロジーに照らせば…

では、一般に、「する」的言語と「なる」的言語の差が、顕在的な言語外文化の差に関連するのか、どうか？

池上教授は、言語のタイプと併せて、言語外の文化のタイプに言及しています（前出書）。文化のタイポロジーからすると、

分析的思考対非分析的把握、人間中心の哲学対自然中心の哲学、積極的行動様式対消極的行動様式、個人主義対集団主義……

といった特徴が浮かび、それらは「する」的と「なる」的、すなわち〈動作主〉指向型と〈出来事全体〉把握型の対立と相關するように見える、という。これこそ興味をそそる指摘です。

ただし、池上教授は、「実際に相關関係がありうるかどうか」は、「もはや言語学の範囲を遙

かに越える問題である」として慎重に判断を留保されましたが、少なくとも日本語と日本人に限って見ると、第一部で見た日本文化の諸傾向は非分析的・自然中心・消極的行動様式・集団主義……の側に属し、その総和としての凹型文化の中で「なる」型表現が常用・頻用されているわけです。双方が一体を成しているとする見方に無理はないと考えます。ただ、双方がフィードバックして相關関係を深めてきたにしても、元来はどちらが因でどちらが果であったか、因果関係の深奥を突きとめることまでは、もつと考察を重ねた上でないと出来ません。それだけに今後に残る興味も大きいのですが、日本民族のコア・パーソナリティーに「なる」的な感覚がすでに宿っていたという観察との結びつけは捨て切れないものがあります。

●利益態の発達と「人情の向上」

『授受動詞』と呼ばれる一群があります。「やる」「くれる」（敬意を含む）「あげる」「くださる」「そして「もらう」「いただく」——英語ならgive一語を能動態と受動態に使い分ければすむものが、このように分かれています。

その授受動詞が、いわゆる補助動詞になって、……てやる……てくれる……てあげる……てもらう……ていただく等々々々になった時、松下大三郎『改撰標準日本文法』に集大成された『松下文法』に言うところの、動詞の相の一つである〈利益態〉が生まれます。文法的慣用の一部です。「利益態は動詞の二相であつて其の作用が或る人の利益となることを表すも

[著者略歴]

芳賀 綏 (はが やすし)

1928年生まれ(北九州市出身)

東京大学文学部国文学科卒業。東洋大学・藤女子大学・法政大学助教、
東京工業大学・静岡県立大学教授等を経て、
現在、東京工業大学名誉教授。

著書に『言論と日本人』(講談社学術文庫、1999)

『日本語の社会心理』(人間の科学社、1998)

『日本人の表現心理』(中央公論社、1979)

『あいまい語辞典』(共著、東京堂出版、1996)

『現代政治の潮流』(人間の科学社、増補三訂1989)

『指導者の条件』(三修社、1980)

『昭和人物スケッチ』(清流出版、2004)ほかがある。

にほんじん じんごう げんごぶん かりんこうぎ
日本人らしさの構造——言語文化論講義

© HAGA Yasushi, 2004

NDC810 320p 20cm

初版第1刷——2004年11月1日

著者——はが やすし
芳賀 綏

発行者——鈴木 一行

発行所——株式会社大修館書店

〒101-8466 東京都千代田区神田錦町 3-24

電話 03-3295-6231(販売部) 03-3294-2355(編集部)

振替 00190-7-40504

[出版情報] <http://www.taishukan.co.jp>

装丁者——井之上聖子

印刷所——壮光舎印刷

製本所——牧製本

ISBN 4-469-21290-3

Printed in Japan

本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、
著作権法上での例外を除き禁じられています。